

ケースメソッド教授法についての視察報告

慶應義塾大学ビジネス・スクールを見学して

久恒 拓也（広島大学大学院・院生）

1. 本視察の趣旨・目的

本視察の目的は、本学教育学研究科による教職課程教員養成プログラムの履修者が、将来の授業者として、ケースメソッドに関する慶應義塾大学大学院ビジネス・スクール（以下 KBS と略記）の授業に見学を兼ねて参加することにより、教える者を教えることについての視野を広げることや何らかの示唆を得ることにある。ありふれた授業視察が、教室の後方あるいは側面からの見学であるのに比べ、今回の視察では、聴講者の一人という役目が我々観察者にも与えられている点が稀有であるといえる。

2. 視察授業の概要

（1）講師と聴講者の構成

講師は T 氏。聴講者は登録上 22 人。一般企業出身の者が多数で、中には他の大学院で教鞭を取っている者もいた。大学院生としての属性は、修士課程・博士課程どちらの者も混在しているといった様相である。そこに視察者 6 名が加わる。

（2）授業の概要と位置づけ

視察対象となる授業は、夏季の集中講義形式で行われるものである。今期の開講は、T 講師によれば単位の認定がされるわけではなく、聴講者の希望による自主勉強会という位置づけにある。ただし、授業内容自体は正規と変わらない。

授業に通底するのは、ケースメソッドを多様な場面に援用しようとした時に、どういった問題が生じるのかという点をじっくりと考えることである。ケースメソッドをもともと所属していた組織に戻ってから行なおうとしている聴講者にとって、これが大変意義深いことであるのは、外部者である報告者にとっても一目瞭然である。

視察した授業の回は最終のコマにあたり、聴講者はケースメソッドという存在にかなり慣れていたということも一応付記しておく。

（3）授業の流れ

各授業では、それぞれの回で扱うケースの課題に討論形式で取り組んでいく。前半はグ

グループごとの少人数で討議し、自分たちなりの考えを持った状態で、全体討論に臨む。全体討論は、割り当てられた司会（講師）役の聴講生が仕切って進めていく。

3. ケースメソッド教授法の授業視察から得られた示唆

（1）少人数ならではの強み

ケースメソッドは、想像力を活用する面が強い。自分であったらどういう理由でその選択をするかということ在必死で考えるわけである。その考えを、要はどのように授業の中で発信していくか、または他者と意見を交換するか、批判的に理詰めにしていくのか、が重要となる。そういった手段を円滑に行わせるには、少人数であることが最も有効な手段であり、逆に多人数すぎれば言いたいことが言えずに消化不良に終わる場合が多くなるだろう。教室内の人数が20数人の今回視察対象とした授業でさえ、発言頻度の高い人とそうでない人が分かれていたので、人数にはかなりの注意を払わなければならないと感じた。

（2）教えることを想定した学びとして

KBSで学んだ者が最終的に目指すところは、自身が本来置かれている環境で、ケースメソッドを用いた社会人教育をすることである。したがって、視察対象授業は「教えることを想定した学び」としての性格を強く帯びていることになる。しかも、ビジネス・スクールで学んだことが、現場で機能しない方法論にとどまっているということでは困るから、実用性が高くなるように、将来の導き手となる受講者に、講師という立場を経験させるという仕掛けが用意されている。

4. おわりに

今回の視察を終えて感じたのは、大きく二つのことである。

一つは何かをじっくり深く考えさせ、さらに考えた内容を授業内容に投影するためには、少人数を維持することが絶対に不可欠であるということだ。視察者が将来担うことになる教職課程の授業は、一定の知識を一方的に教授するということが優先され、その点は圧倒的に不利な状況にある。

もう一つは、指導する立場になる者は、そのための訓練をしておくことが、プラスになってもマイナスにはならないということである。要するに、教育に関する技術や方法、理論を知っていても、それを行なうとなったならば、どのような問題が生じ得るかということに関する想像力を、ケースメソッドは養ってくれるのであり、ケースメソッド教授法を教える者は、またさらにその上の想像力・対応力をもっていなければならないだろう。

教師教育においても、その教育に携わる者はほぼ例外なく上述のような力を求められるはずであるが、それが教授法や、授業の形式上重視されていない点で、現在の教職課程は根深い問題を抱えているといえる。